＜2023 年　第 6 回　都市環境デザインセミナー＞
テーマ：まちなかに生きるヴォーリズ建築―管理運営の視点をふまえて―

＜日時＞
2023 年 12 月 22 日（金曜日）18：30～20：30
＜場所＞
会場：都市魅力研究室（グランフロント大阪北館 7 階）+Zoom 会議
＜参加者＞
会場定員：19 名(都市環境デザイン会議会員：12 名、学生：２名、一般：５名)
Zoom 参加 17 名(都市環境デザイン会議会員：４名、学生：２名、一般：11 名)

＜話題提供者＞
角野 幸博さま（関西学院大学建築学部教授）

＜テーマ＞
まちなかに生きるヴォーリズ建築―管理運営の視点をふまえて―

＜趣旨＞
　ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（一柳米来留）は、1905 年 2 月に滋賀県立商業学校の英語教師として近江八幡市に着任しますが、ほどなく解任されてしまいます。しかしその後もキリスト教の伝道に一生を捧げ、YMCA 施設や教会堂の設計を契機に、建築家や事業

家として活躍しました。彼の作品は全国に残り、教会や学校、百貨店、銀行、個人住宅など多岐にわたるとともに、デザインもスパニッシュ・ミッション・スタイルだけでなく、和風、西洋古典、アール・デコをはじめ多様な様式を縦横無尽に取り入れています。膨大な数の建築作品は今までに、保存、用途転用、建替え、取り壊し等、様々な物語を紡いできました。近江八幡市を始め各地で、これらの建物を地域づくりに活用しようという動きが進み、その管理運営や財源については課題を抱えながらも様々な試みがなされています。

今回は、関西学院大学教授でヴォーリズ研究センター長の角野幸博さまをお招きし、ヴォーリズ建築の再評価とまちづくりへの活用さらにその運営主体のあり方について、都市環境デザインの視点からお話いただきたいと思います。みなさま、奮ってご参加ください。

セミナー世話人　岡 絵理子

＜講師紹介＞
角野 幸博（かどの・ゆきひろ）
関西学院大学建築学部教授・ヴォーリズ研究センター長
1955 年京都府生まれ。1978 年京都大学工学部建築学科卒業。1980 年同大学院修士課程修了。1984 年大阪大学大学院工学研究科博士課程修了。（株）電通、武庫川女子大学教授等を経て、2006 年関西学院大学総合政策学部教授、2021 年より現職。工学博士。一級建築士。

＜主催＞
都市環境デザイン会議・関西ブロック

まちなかに生きるヴォーリス建築―管理運営の視点をふまえて―

角野 幸博

●はじめに

関西学院大学建築学部では学部開設に合わせて、ヴォーリズ研究センターを設立しました。関学のキャンパスデザインにヴォーリズが深く関わったこともあって、建築学部としてもヴォ―リズについてしっかり研究していこうという狙いがあります。そのメンバーは学内の教員中心ですけれども、ヴォーリズ研究の第一人者である大阪芸術大学名誉教授の山形政昭先生に客員教授として加わっていただき、山形先生ご自身がまだやり残されていることがあるとうかがい、それも含めて研究を始めたところです。今日はその研究センターの活動のごく一部にすぎませんが、私の関心領域を中心にお話しいたします。

●ヴォーリズとはどういう人か

まずヴォーリズという人物についてあまりご存知でない方もいらっしゃると思うので、簡単に紹介します。

キリスト教伝道のために日本にやってきたのが 1905（明治 38）年です。近江八幡に着任し、伝道の足がかりとして、八幡商業の英語教員になるのですが、ほどなく八幡商業を解任されてしまいます。解任された後もキリスト教の伝道を続けるためには生活費を稼がなければなりません。そこで 1908 年にヴォーリズ建築設計監督事務所というのを作ります。もともと彼は建築の専門家ではありません。大学はコロラド州のコロラドカレッジを卒業したのですが、在学中にキリスト教伝道者になるという、強い意志を抱き、それで日本に派遣されてきました。彼は元々建築に対する強い関心を持っていて、八幡商業を解任された後、おそらくは日本の大工さんなどにも学びながら、建築現場の管理等の仕事を始めました。1910 年に現在の近江兄弟社の前身である近江ミッションという組織を作ります。これに合わせてヴォーリズ合名会社を設立し、アメリカから建築家を呼んできて本格的に設計業務に取り組み始めます。

近江ミッションは、建築設計業務以外にも近江八幡を拠点にして様々な活動をするのですが、建築業務についてはヴォーリズ建築事務所という名前に変更して、仕事を増やしていきます。その後一柳満喜子と結婚し、第二次大戦前に日本に帰化します。戦後も設計事務所を経営して、1964 年に亡くなります。亡くなる前の 1957 年にくも膜下出血で倒れた後は、近江八幡でずっと療養を続けておりました。亡くなる前の 1961 年にヴォーリズの意思を継いだ、現在の一粒社ヴォーリズ建築事務所が設立されます。

●お話しのポイント

それで今日のポイントなんですけれども、ヴォーリズについての情報はいろいろあるのですが、素人であった彼がどのようにして膨大な数の建築設計を行えたのか、なぜそのような成果を上げられたのかを疑問に思う人がたくさんいます。まずはこのことについて考えてみます。私としてはどうやら以下の三つのポイントがあったんじゃないかと思います。

一つが YMCA およびキリスト教のネットワークです。二つ目は軽井沢という場所の存在です。そして三つ目が、広岡浅子を

始めとする財界との繋がりです。これら繋がりが、彼が非常にたくさんの成果を残していったことの理由ではないかと思います。

●ヴォーリズ建築とは

ところで、ヴォーリズ建築というふうによく言われますが、その実態は曖昧な部分もあります。もちろん一番狭い意味というか本来の意味では、ヴォーリズ建築事務所の作品すなわちヴォーリズ建築事務所が設計した図面が残っていて、そこにヴォーリズ建築事務所の判子があるものという定義になるはずですが、実は事務所所員が個人的に設計したものもヴォーリズ建築の中に紛れ込んでいたりします。それから一粒社ヴォーリズ建築事務所になって以降、つまりヴォーリズ自身はもう設計をしていない時期のものも、事務所の作品としてカウントされているケースがあります。さらにはヴォーリズ建築事務所でもなければ一粒社の作品という確証はないけれども、何となくヴォーリズの建築らしい雰囲気が漂うといったものまで、「ヴォーリズ風」とか、ちょうど千利休の「利休好みの茶器」になぞらえて「ヴォーリズ好み」とでもいえるものまで含めて、ヴォーリズ建築と認識されているケースがあります。もちろん我々としては、そこは厳密に確認していきたいと思っております。

国内のヴォーリズ建築の概数なんですけれども、これは全て山形先生が今まで調べられたことの受け売りですが、まず設計図が確認できるものがもう 1800 件ぐらいあるそうです。ただしこの中には改修工事や構想レベル等いろんなものが混ざっています。そしてその中で実際に竣工が確認できたものが 600 件強です。

さらに、現時点で残っていることが確認できるものが 130 件プラス α です。この辺りは非常に曖昧な大雑把な言い方しかできないのですが、近年確認されたものもあります。「あれはヴォーリズだった」みたいにですね。今の時点ではこういった概数しかご紹介できません。

それからヴォーリズが設計した建物そのものは、取り壊されたんだけれども、そのデザインを継承して、建て替えられたというケースもあります。これらの全体が我々の研究センターの研究対象になっています。

●ヴォーリズ建築の魅力

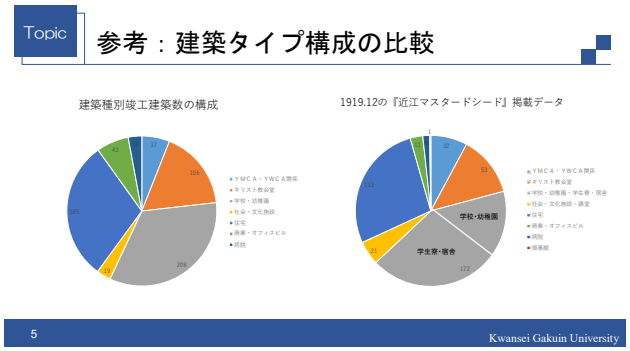
さてヴォーリズ建築のどこに魅力があるんだということですが、今まで建築家の間でヴォーリズの建築が評価されてきたかというと必ずしもそうは言えません。彼は本当にいろんなデザインのものを大量に設計していますが、そもそもそんなたくさん設計できたのかという疑問もでてきます。しかし実際にヴォーリズの建築に住まわれた方あるいはそこを使っておられた方が異口同音におっしゃるのは、とにかく居住者本位の設計になっているということです。特に屋内の快適性、それから光の取り入れ方が極めて快適で魅力的といわれます。また階段の勾配や踊り場の取り方等が上手で上りやすいといったことを皆さんおっしゃいます。

それからもう一つは、彼の元々のミッションがキリスト教の布教ということでありまして、建築空間の中に彼の信仰の姿勢がいろんな形で込められているともいわれます。例えば窓のサッシのデザインが十字架をイメージしてるというようなことです。

●建築タイプ別竣工・現存実態

さて先ほど作品の概数を申し上げましたけれども、建築タイプ別の竣工数と現存数を整理してみました。細かい数字にこだわるというより、建築タイプ別にどのようなものがどれぐらいの割合で残ってるかに注目いただければと思います。現存数が多い建築として教会、学校、住宅が出てきます。現存率が高い建築としては、社会文化施設なのですが、ただし実数は非常に少ないです。

そして現存率が高い地域として、滋賀県近江八幡や軽井沢が浮かび上がってきます。



この左側の円グラフは、1950 年代半ばぐらいまでに竣工した建物の構成を示したものです。時計回りにいきますと、水色がYMCA 関係、橙色がキリスト教会、グレーが学校関係、オレンジ色か社会文化施設、ブルーが住宅、黄緑が商業業務系というふうに続きます。そして右側の円グラフが1919 年の時点までのタイプ別の構成です。ただし、1919 年のデータでは、学校・幼稚園と学生寮・宿舎は分けて捉えられています。ですので円グラフではわかりにくいかもしれませんが、実はよく似ています。結局彼の建築で竣工したものとしては、キリストの教会堂、学校・幼稚園それから住宅が多いということがご理解いただけると思います。

ここからはその特徴を順番に紹介していこうと思います。まずチャペルはキリスト教の伝道者としてのヴォーリズのミッションを体現するものであり、当初キリスト教会として建てられたものは、やはり今もチャペルとして残るものが多いのです。現在も引き続きその教会を拠点にして、布教活動をしているわけです。つまり社会的寿命が長いうえに維持管理主体が明確であるために、修繕されながら長く使われる例がたくさんあります。またその中で、用途を問わず約半数が国の登録有形文化財になっています。登録文化財の事例が多いというのがヴォーリズの特徴であるということです。

この左の写真は日本福音ルーテル熊本教会、右は京都の御幸町教会です。学校とか幼稚園も、教会と同様にその組織のミッションそのものを担ってるケースが多く、私立の関西学院大学も含めて、学生募集等の広報活動でヴォーリズ建築が紹介されることが多いのです。このような理由で学校幼稚園も比較的残りやすいのでしょう。しかも単体の建物だけじゃなくて、キャンパス計画にまで関わったケースも結構あります。ただし学校が時とともに、成長拡大したり新しい組織を作ったりする中で、建物の増築や改築が行われます。そういう中でシンボルになる建物、例えば本館であったりチャペルであったり、そういったものは残されるケースが多いですね。また、文化

財の指定率なんですけども、学校の登録有形文化財率だけを見ると 30%強なんですけれどもそれに加えて神戸女学院の 12 の建物が重要文化財に指定されています。重要文化財の指定を受けているのは神戸女学院だけです。また県とか市の指定文化財であるということも結構あります。

保存活用という視点で課題があるのが、住宅です。彼は個人住宅や別荘、邸宅、宣教師館、社宅等も設計しています。大体想像つくと思いますが、個人住宅の現存率は高くないです。

つまり、基本的に個人の所有であり、世代交代や相続を契機に転売されたり、建物の老朽化や設備更新のために建て替えられたりする割合が高くなりがちです。ヴォーリズの作品の中で、住宅の比率は先ほどの円グラフのように非常に高く現存数も多いのですが、現存率は高くありません。なお、ざっくりとした言い方ですが、お屋敷や邸宅は、数自体がそんなに多くないですし現存率も低いのですが、残ってるものは、結構ユニークな使われ方をされています。それから、伝道のために宣教師が住んだ宣教師館ですが、残っているものは様々な活用のされ方がなされています。社宅についてはほとんど残っていません。

たとえば邸宅では、京都に残る旧駒井家住宅、宣教師館では北海道の北見にある宣教師館だったピアソン記念館をご紹介します。実はピアソン記念館がヴォーリズの設計だということはずいぶん後になってわかったことです。山形先生が図面と現地を照らし合わせて発見されたのですが、それまでもピアソン記念館として保存活用されていました。

それから、商業業務施設や病院は建て替え率が高いです。やはり商業業務系ですから土地の効率的な活用を求められたり、時代のニーズに合わせて用途を変えたりということで、建て替え率が極めて高いのです。ただし残っているものは建築の魅力を生かしながら活用されています。たとえば京都の東華菜館は建設当初は八百政という西洋料理店でしたが、レストランとしての機能はそのまま受け継がれています。それから YMCA 関係は、冒頭に申し上げたように、ヴォーリズが日本にやってきて布教をしていく上で密接な関係を持っていた団体です。彼はＹＭＣＡの建物も多く設計し

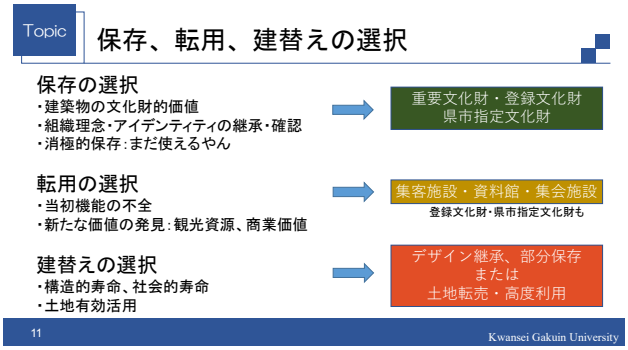
ましたが、建て替え率は非常に高いです。どんどん建て替わったなかで、残っているものは希少的価値があります。例えばこの近江八幡 YMCA 会館は、まさにヴォーリズが最初に手がけたものです。また、左の写真は京大近くの東一条を西に行ったところにある、ＹＭＣＡ地塩寮という建物です。私が学生の頃からこの建物は何だろうと思っていたのですが、ずいぶん後になってからヴォーリズの建物だったことを知りました。

それからもう一つ面白いと言いますが特殊な例として、特定郵便局があります。特定郵便局というのは、その地域に住んでおられる地元の名士が、自分の土地建物を使って始められた郵便局のことです。全国にたくさんありますが、滋賀県内にはヴォーリズが設計したものが何点かあります。

郵便局としての機能はすでに終えており、土地も建物も個人の所有ですから、住宅と同様に相続等のときに無くなってしまう恐れがあります。ただ滋賀県内のものについては、例えばこの今津郵便局や近江八幡の郵便局、これは地元の住民組織が所有者の了解のもとで運営されています。このように、建物の種類や所有形態によって、保存か転用か建て替えかという選択を迫られてきたわけですね。

●判断の基準

どのような判断がなされてきたのかということですが、まず当初の用途を尊重しながら保存するという選択がなされる場合というのは、建築物の文化財的価値とともに、所有主体の活動理念やアイデンティティに関わるケースが多いです。つまりチャペルや学校は設立当初の建物を継承することがアイデンティティの確認につながるということです。それから、消極的な継承としては、まだ使えるし、とりあえず使い続けようというのもあります。組織の活用理念と不可分という場合は、保存という選択に繋がるのだと思います。これらの場合は、重要文化財や登録文化財あるいは県市指定の文化財として登録されるケースが多いですね。つまりどうせ保存するんだからその費用の一部をできるだけ補助してもらいたいという意図が働きます。それから二つ目が、建物の魅力はあるけれども元の機能はもう満たせない、あるいは満たす必要はない場合に、新しい機能を探る、つまり用途転用というケースです。用途転用の代表的なものは、集客施設化であったり資料館であったり、あるいは集会施設化ということになります。



この場合も、登録文化財等に指定されるケースが多いです。ご存知のように登録文化財の場合は、内部の改修をかなり自由にできます。外観はいろいろ制限が出てきますので、外観の改修の費用は欲しいけれど中は自由に使いたいという理由があるのかなと思います。そして、構造的な寿命、社会的な寿命、あるいは土地の有効活用というような理由で、建て替えの選択がなされる場合があります。そのときに、元のデザインをどういう形で継承するかということについていろんな工夫がなされるわけですね。もちろん、完全に取り壊してまったく異なる用途とデザインのものに建て替えるという選択もなきにしもあらずです。この三つの選択肢からどれが選ばれたのか、それはなぜなのかということを調べようとしています。

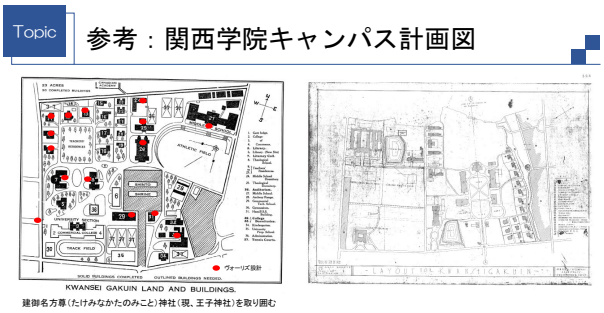
●保存活用事例

保存されたものでいくつかの事例をご紹介しましょう。まず教会ですね。先ほど申し上げたように、布教という機能の一貫性という面では残されやすいものですが、例えばこの写真の京都バプテスト教会の場

合、外観は大きく変わっています。左側の写真は竣工時のデザインをペーパークラフトで再現したもので、竣工時はこんなデザインでした。ところが今現場に行ってみますと外観はこの真ん中の写真の通りです。もう全然違うのですが、中に入ると右の写真のとおり、ヴォーリズ建築そのものです。普通は外観をかなり意識しますが、こういうケースもあるわけです。

それから学校関係もミッションの継続と機能拡充への対応の両立という課題があります。関西学院ももちろんその代表です。マスタープランにまでヴォーリズが関わっていますので、そこへのこだわりは当然あります。例えば中央芝生広場と時計台、背後の甲山、そして前面の学園花通りがつくる軸線は建物の保存や改修、建て替えに際しても強く意識され続けています。当初のキャンパスには本館や礼拝堂に加えて教員住宅や寄宿舎もあって、そこに次々と学舎が建てられ、改築されてきたのですが、先ほど申し上げたように、全部が全部保存されるというわけではありません。マスタープランを尊重し、シンボル的な建築は保存しながらも、それ以外のところは、そのデザインを継承するような形で建てかえられています。

これは余談ですが、このスライドは関学の発祥の地である王子公園にあった原田の森キャンパスと、今の西宮上ヶ原キャンパスとを比較したものです。左側が王子公



園、原田の森のキャンパス計画ですが、この真ん中にあるのはもとからあった神社なんですよ。健御名方の命（たけみなかたみこと）神社、通称王子神社です。つまり原田の森キャンパスというのはこの神社の鎮守の森を取得して、その神社を包囲するようにキャンパスを作っています。それで今この神社はどうなってるかといいますと、新たに造られた道路の南側に移転しています。それから右側の図面が西宮上ヶ原キャンパスです。先ほど申し上げたように、背後に甲山があって、この軸線を強く意識してまっすぐに学園花通りが通っています。そしてそのアイストップのところに、旧図書館である時計台があり、その前の芝生広場を挟んで概ねシンメトリーな構成をとって学舎が建てられました。

次に用途転用の事例を御紹介します。スライドの左側が特定郵便局だった旧八幡郵便局、それから右側は静岡にあるもとの宣教師館です。これらはいずれも資料館ある

いは観光集客といったことを意識して、用途転用がなされています。

このスライドは左が高島市今津のヴォーリズ資料館です。元は旧百三十三銀行今津支店として建築され、その後滋賀銀行になりました。広域市町合併前の今津町のときに、町がこれを買い取ります。合併後は高島市の物になり、ある NPO が指定管理を受けています。それから右側は、旧醒井郵便局の局舎ですが、これは以前の米原町、現在の米原市が所有権を持ち、今は資料館として使われています。また、地域の人たちのコミュニティ施設化している事例もあります。旧水口図書館は、現在は甲賀市になり、甲賀市が所有しています。若木の会という地元の住民団体が指定管理業務を受けて管理しています。旧日夏村の役場と産業組合の合同庁舎であった日夏里館（ひなつさとかん）は、現在は彦根市が所有して、それを地元の団体が運営しています。それから、もっとダイナミックに商業施設化しているものもあります。このスライドの右側は、旧神戸ユニオン教会ですが、今

はフロインドリーブというパン屋さんのカフェレストランになっています。外観はほぼ元のままですが、内装は大きく改修され木造のシザーストラス構造を見せながらカフェ営業をしています。

それから、このスライドの左は、旧ナショナルシティ銀行の神戸支店長宅です。社宅ですが現在は写真スタジオになっています。このような用途転用もあるということです。

それから、建物は完全に建て替わったけれどデザインはちゃんと継承しているという例も結構あります。このスライドのプール学院の中高等学校は、竹中工務店が設計施工したものですが、どのような狙いでデザインしたかを、ちゃんと資料に書いておられました。外観デザインは、ヴォーリズ設計の旧校舎の特徴を継承しながら、現代にふさわしい学校建築をめざしたようです。平面計画は大きく変わっていますが、バラ窓とか照明器具等は前の建築を継承しており、建て替えたけども、伝統を継承しているという事例です。

それから旧主婦の友社は御茶ノ水スクエアに建替えられましたが、デザインは受け継がれました。

またヴォーリズは大同生命のオフィスビルをたくさん手掛けています。広岡浅子とのつながりを生かした仕事だったと思いますが、全部なくなってます。本社ビルも以前のものはヴォーリズの設計でしたが、建

替えられました。それでも元の建物のデザインモチーフを随所に取り入れています。それから皆さんご存知の大丸心斎橋筋店も建替えられました。これは記憶にも新しいのですが、都市再生特措法の特区制度を使って容積率を上げて建て替えられました。既存の外壁を新しいビルの躯体に貼り付けて外壁を保存しています。山形政昭先生は、「薄皮饅頭みたいなものです」とおっしゃっていました。それでも内装についても、要所は保存されていて、容積率の割り増しがあったからこそデザインを継承できたのかなとも思っています。

●用途転用と管理運営者の実態

さて、ここからが本題です。まだちゃんと整理できていないのですが、建築タイプ別に、現存している建物について、その所有者と管理運営者、それから用途の継承あるいは変化の状況を、すべて拾い上げる作業を進めています。ただし元々住宅で、今も個人住宅として普通に使用されているものは、原則として除外していますが、住宅についてもいくつか注目すべき事例をご紹介しましょう。

まず軽井沢の朝吹別荘ですが、個人が所有したまま、軽井沢タリヤセンという団体が展示施設として運営されています。近江八幡市旧安土町の伊庭慎吉アトリエは、近江八幡市の所有のもとで安土町の郷土館になっていて、住民団体である旧伊庭家住宅利用団体オレガノという地元団体が管理運営しています。

それから、先ほど個人住宅は住宅としては継承されづらいと申し上げましたが、注目すべき例もあります。近江八幡の吉田悦蔵邸ですが、吉田悦蔵はヴォーリズと一緒に近江ミッションを始めた人です。今息子さんがそこに住まわれながら、一般公開もなさっています。

また、邸宅などは企業が買い取って会社の施設として使用される例があります。例えば朝吹常吉邸は、現在は日本テレビの迎賓館になっており、その前は東芝が所有していました。そういうふうに所有が転々と変わるというケースもあります。また、ぜひ行ってみたいと思うのが、旧バプテストミッション寄宿舎です。まさに寄宿舎だったのですが、これは京都の吉田神社の近所にあって、白亜荘というアパートになっています。すごい人気だそうです。家賃が安いので。

それから特徴的な三つの住宅を紹介します。これらは今後の管理運営の仕組みを考えていく上で注目すべき例です。まず旧諏訪邸ですが、宝塚雲雀ケ丘にあって、東洋製罐の創設者でもあった高碕達之助が建物を買い取って居住し、その後高碕達之助記念館となっています。東洋製罐は後に東洋食品になるのですが、記念館を維持するために株式会社とは別に公益財団法人を設立し、創業者の記念館という形で運営されています。今はその中にヴォーリズを紹介する部屋を創っておられます。

次が駒井家住宅です。駒井卓という京大教授の居宅で、北白川にあります。ここは公益財団法人日本ナショナルトラストが買い取ってそこが運営しています。日本ナショナルトラストの本拠は東京にありますが、地元の京都の方々が運営して、現在も一般公開されています。

それから六甲山にある小寺山荘です。元の持ち主の小寺敬一は関学の教授でした。御影山手に本宅があり、別荘を六甲山に持っておられました。その六甲山の別荘を、特定非営利活動法人アメニティ 2000 協会

という団体が買い取って運営されています。つまり、この3所は経営基盤がかなりしっかりしているということです。もちろんそれぞれ大変苦労しながら工夫を重ねて運営されていると思いますが、一般の個人住宅とか個人所有の建物に比べると、しっかり管理のための組織と仕組みを考えてこられてきたと思います。

それから次が同じく住宅ですが宣教師館を紹介します。元々はキリスト教のそれぞれの会派が宣教師を派遣する際に用意したもので、宣教師が個人所有するものではなかっただろうと思いますけれども、個人や自治体の所有に変わっているものが結構あります。例えば同志社宣教師館は、今はバザールカフェというカフェになっています。所有関係についてはまだ調べていないのですが、いずれ調べようと思っています。また近江八幡にはウォーターハウス邸やヴォーリズ邸という重要な宣教師館が残っていて、これらについては、公益財団法人の近江兄弟社が所有して、それを直接管理したり、地元のまちづくり団体に運営委託したりしています。北海道の北見にあるピアソン記念館は、日本で一番北にあるヴォーリズの建物なのですが、今は北見市が所有して、そこの管理運営をピアソン会というNPOが行っています。それから、近江八幡にもう一つパーミリー邸（柿元邸）というのがあります。これは個人所有なのですが、その維持費用をクラウドファンディングで補っています。このように宣教師館はいろいろ工夫しながら残されているものがあります。またこれは勝手な憶測ですが、多くの宣教師館は洋館です。地方で洋館建築というと当時はきっと珍しかったと思います。そこでかなり目立つ存在で、宣教師が住まなくなったあとも大事にされたのではないでしょうか。

それから先ほど学校や教会はそのまま引き継がれやすいと言いましたが、もちろん例外もあります。先ほど紹介した神戸ユニオン教会もそうですし、滋賀県豊郷町の豊郷小学校も注目すべき事例です。しばらく前に建替え問題でマスコミを賑わしましたけれども、結局町がそのまま所有して維持管理を続けています。町立図書館、子育て支援センターなどとして使われているほか、人気アニメ「けいおん！」の聖地として多くの観光客を集めています。社会文化系施設では先ほどご紹介した特定郵便局以外にも注目すべき事例があります。最近話題になっているのが、山の上ホテルですね。これは佐藤新興生活館という建物だったのですが、その後作家たちの定宿として有名になった「山の上ホテル」として用途転用されました。ところが2024年の2月で休館することになったそうです。

それから商業業務系の建築は建て替えられやすいと言いましたが、そういう中で、注目すべき事例がいくつかあります。まず大丸百貨店ですね。心斎橋店は先ほど紹介しましたが、京都店は東側の壁の一部がわずかに残っているそうです。それから大丸神戸店は、居留地の中にある旧ナショナルシティ銀行神戸支店を買い取り、「大丸神戸居留地38番」という名前でブランドショップ等をテナントとして営業を続けています。

銀行系やレストラン東華菜館のことも先ほど申し上げたとおりです。また、商業業務系といってよいかどうかわかりませんが、神戸ゴルフ倶楽部というのが六甲山にあってそのクラブハウスが現在も使われて

います。会員制なのでなかなか見学できませんが。

●管理運営主体の課題

このようにいろんな継承の道筋をたどっているのが、ヴォーリズの建物です。そういう中で今日はその所有管理運営主体について問題提起をしようと思います。やはり最初に紹介したいのが、近江兄弟社の役割です。ヴォーリズ自身がその前身である近江ミッションの創立者の一人です。現在近江兄弟社グループは、公益財団法人と社会福祉法人それに学校法人を持ち、そして株式会社が三つぐらいあります。そのなかの公益財団法人近江兄弟社がヴォーリズの住んでいた建物をそのままヴォーリズ記念館

ならびに本部事務局として使用しています。またヴォーリズは非常に早い時期から病院の設立に奔走し、その流れでもって、記念病院と老健センターが今活動をひきついでいます。記念病院の旧本館は、現在ツッカーハウスという名前になっています。それから学校法人であるヴォーリズ学園は、以前は近江兄弟社学園と称していましたが、今は名前までヴォーリズにしてしまいました。この学園のなかにあるハイド館は、ヴォーリズの奥さんだった一柳満喜子が設立した清友園幼稚園の建物です。それが近江兄弟社学園となり名前を変えてヴォーリズ学園になりました。

もちろん株式会社としての近江兄弟社が全体の運営の屋台骨です。関連会社もあり、また一粒社ヴォーリズ建築事務所もグループの重要な一員です。近江兄弟社グループにとってヴォーリズは創設者であり、グループの活動を支えてきた人物なので、その建築遺産をしっかり受け継いでいくという意思があります。

とは言っても、近江兄弟社グループがヴォーリズのすべての建物を支えるわけにはいきません、先ほどもご紹介しましたが、

様々な民間団体の活動にも支えられています。注目すべき例として、NPO であるアメニティ 2000 協会の活動があります。ナショナルトラスト運動で基金を募って、ヴォーリズ六甲山荘を 2008 年に取得されました。現在一般公開して、喫茶軽食、ミニコンサート、講演会等々様々な工夫を重ねて運営されております。この組織は、過去に神戸市内の邸宅の保存運動にも取り組み、その一環でヴォーリズ六甲山荘の敷地の中に、木材商であった室谷藤七郎の邸宅の一部を移築しています。

それから京都の旧駒井家住宅は、日本ナショナルトラストが寄贈を受けて取得して、以前はアメニティ 2000 協会も運営に関わっていたと聞いております。日本ナショナルトラストの本拠は東京ですので、公

開等の運営日常管理は京都の地元の方が行っているそうです。

それから先ほどの豊郷小学校ですが、豊郷町が土地建物を所有して、直営で今も使い続けています。この建物は、昭和 12 年に豊郷町出身であった丸紅の専務の古川徹次郎の寄付によって建てられた建物です。映像資料も含めて資料が展示されており、町立図書館や子育て支援センターとしても使われています。面白いのは、先ほど申し上げたように、アニメ「けいおん!」の聖地ということで、しょっちゅうマニアが訪ねてきています。モダニズム建築としても立派なものです。

地方公共団体が所有し、指定管理者を定めるという事例は、結構あります。今津ヴォーリズ資料館は、滋賀銀行から旧今津町が取得して、現在の高島市が所有していますが、一般社団法人あすラボという指定管理者が管理しています。

旧今津郵便局は「ヴォーリズ今津郵便局の会」という任意団体が管理していますが、その代表者の O さんは私が学生時代の先輩筋にあたる方で、先日数十年ぶりにお会いしました。

旧今津郵便局も土地建物は個人所有で、一時は近くの電気店が倉庫として借りておられたそうです。その後電気店が閉業して当然倉庫もなくなって、放置されていたそうです。それをOさんたちがヴォーリズ建築であることを知って、何とかしようと活動を始められたそうです。ただ、このヴォーリズ今津郵便局の会は完全な任意団体で、いつ無くなってもおかしくありません。現在、1 階入口の横に 2 坪ぐらいの狭い空間があって、そこを地元の方が、ドライフラワーとか雑貨を販売されていますが、もちろんそれで商売が成立してるようには見えません。また 2 階の一角を地元の写真館が撮影スタジオとして使っておられます。ヴォーリズの建物の特徴である自然光がふんだんに入って、人工照明なしで独特のポートレートが撮れるので、時々使われているそうです。また私がうかがった時は、1 階で生花教室が開催された後でした。このように活用されていますが、所有が個人であり、運営団体が任意団体で、代表者のOさんも、70 代後半以上のはずなので、今後どうなるか、ちょっと心配ではあります。

ここまでは個々の建物の保存活用についてご紹介しましたが、

●群としての可能性

群として捉えられる場合もあります。近江八幡は旧市街地にいくつものヴォーリズ建築があって、それをヴォーリズストリートとしてつないでいこうという動きがあります。ヴォーリズ学園ハイド館、旧ヴォーリズ邸、旧八幡郵便局、近江兄弟社本社、関係者の住宅地区などを繋いでいくことができます。一方でご存知のように近江八幡

には重伝建に指定されてる地区があります。つまり、ある意味では全く色合いの違う建物とゾーンが隣り合い、重なり合って一つの市街地を構成しています。その取り合わせが近江八幡独特の魅力になっているのかもしれません。

それから先ほどの近江今津です。今津にもヴォーリズストリートという看板があります。先ほど言った旧百三十三銀行、その奥の今津教会、さらにその奥の旧今津郵便局という三つだけなんですが、ヴォーリズストリートと称しています。実はこの通りは元々旧今津町のメインストリートで、だからこそヴォーリズ建築が集中したのかもしれませんが、伝統的な町屋建築も軒を連ねていたようです。この三つのヴォーリズ建築はそれぞれ運営形態が違います。旧百三十三銀行今津支店は高島市所有で指定管理者が管理。今津教会は教会自身が所有し運営。そして旧今津郵便局は個人所有で、任意団体が運営。相互に情報交換はなされていますが、やはり活動内容には差があるので、群としてどういう形で取り組むかが今後の課題だと思います。

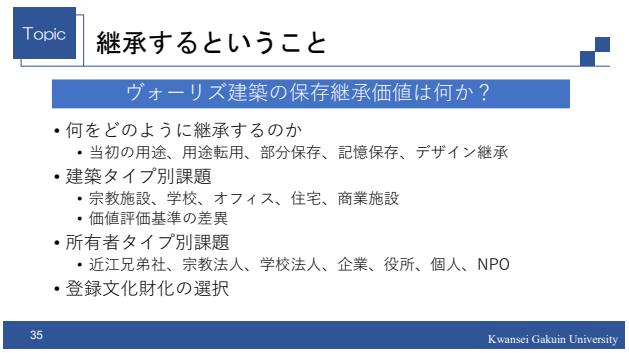
それからもう一つは軽井沢です。ヴォーリズは、夏の間は設計事務所を軽井沢に移して、そっちで仕事をしていました。当時は日本全国のキリスト教伝道の関係者が、夏になると軽井沢に集まって交流されたそうです。そこへ行くと一気に全国の情報が集まり、建築営業ができるというようなことじゃないかなと思っています。ヴォーリズ事務所にとって軽井沢は非常に重要な拠点であり、軽井沢にはたくさんの作品が残されました。別荘建築が多く、取り壊されたものも多いのですが、別荘以外にも教会やテニスクラブのクラブハウスが有名です。一つの街並みを形成しているわけではありませんが、ヴォーリズ建築をたどっていくトレイルといった位置づけは可能だと思います。

この中には登録文化財もあれば、指定を受けてないものもあります。その中で、浮田山荘（旧ヴォーリズ山荘）がずっと売りに出ていたのですが、つい先日買い手がついたということで評判になりました。こういう形でやっぱり動いてるんですね、軽井沢の場合は。ヴォーリズ建築としての価値と、軽井沢という地域としての価値、両方が重なって動いているということだと思います。それはそれで結構なことですが、全国すべてのヴォーリズ建築がそのような状況にあるわけではありません。建物の価値と地域の価値をどう組み合わせられるかがポイントかなと思います。

●継承するということ

結局ヴォーリズ建築の何を継承するのか、そもそもヴォーリズ建築の継承価値って何なのかをきっちり理解し、評価する必要があります。そして、何をどのように継承するのか、当初の用途なのか、用途転換をしても建物を残すべきなのか、あるいは部分保存や記憶保存、デザインの継承という選択肢も出てきます。

また建築タイプ別にも、課題や特徴が異なるということは、先ほどから申し上げている通りです。さらに、所有者のタイプに



よって、課題や方法が異なってくるわけですね。近江兄弟社、宗教法人、学校法人のようにそれぞれの組織のアイデンティティに深く関わるものについては、それなりの対応がなされると思います。しかしそれ以外の建物については結構あやふやな部分が出てきます。

それから、現存するヴォーリズ建築には登録文化財になっているものがたくさんあります。ヴォーリズ建築は登録文化財の比率が高いというのは、やはり残していきたい、継承していきたいという意思が一般の建物よりも強いのかなという気がします。保存修復の費用が補助され、固定資産税も減免されるので結構なのですが、あえてそれを拒否するケースもあります。登録文化財になると売買の際には届け出なければなりません。

そもそも継承されて街なかに生き続けるということ、もっと言うとその建築がその場所にあり続けるということの意義をしっかり考える必要があると思います。例えばそれが地域のある市民の誇りになっているのかどうか。あるいは地元だけじゃなくてよその地域からも支持を得ているのかどうか、そしてそれが実際に使われているのかどうか、それを支える管理運営組織はどうなっているのか。

ヴォーリズの建築っていうのは、決してシンボリックに堂々と建つ建築ばかりではないですね。堂々と建つ建築に対して、街の中に普通に佇むということをどう評価すべきなのか、市民にどのように愛され、支持されているのかにもっと気を遣うべきかもしれません。

今から10年ちょっと前に、ヴォーリズ建築文化全国ネットワークという組織が立ち上がりました。これはヴォーリズの建築を所有あるいは管理している方々を中心にしたネットワーク組織で、団体会員と個人会員とがあります。団体会員は基本的には所有者とか運営者中心で、大体25団体ぐらい入っておられます。それ以外に個人会員がいらっしゃいます。このような形で、よその地域からも支持され応援されるという仕組みが作られています。例えば今日もご紹介した北海道北見のピアソン館は、周りに関連する建物や組織はありませんが、会報を発行し続けながら活動し、それを全国のネットワーク組織の人たちが応援しています。そのように支えるネットワークも重要かなと思っております。

●地域創生とヴォーリズ建築

実は私の一番の関心は、ヴォーリズ建築は地域の創生戦略としてどう使いうるのかというところです。ヴォーリズ建築は、外観よりも住み心地とか使い心地という快適性が評価されています。さらに建物の魅力に加えて、ヴォーリズという人物に対する支持が非常に大きいのです。彼はキリスト教伝道者であり、そのために様々なビジネスもやってます。近江兄弟社が所有していたメンソレータムの製造販売権は、ヴォーリズの布教活動を支えるために、アメリカ人の実業家が提供しました。ヴォーリズはアメリカから建築金物を輸入する輸入代理店やハモンドオルガンの輸入もしています。これらは全て伝道活動を支えるためであり、他にも彼にまつわる様々な物語があります。そういう彼の生き様が建築と結びついているのです。地域創生という視点からは、建築プラス彼の生き様を取りこむことが効果的と考えます。

そしてそれを主体的に支える組織が必要です。地元だけでなく、地域間、あるいは

組織間のネットワークができればいいなと思います。また町並みをヴォーリズ建築だけで作れると思いませんが、群としてどう繋いでいくかという仕掛けと、ヴォーリズ建築以外の他の要素と組み合わせる中で、地域の魅力を発信していく工夫が必要です。

今ヴォーリズ建築を直接支えている人と組織を確認し、さらに今後ヴォーリズ建築と連携可能な人と組織を探る必要があります。もっと繋がりを広げていくいくということが課題ではないでしょうか。

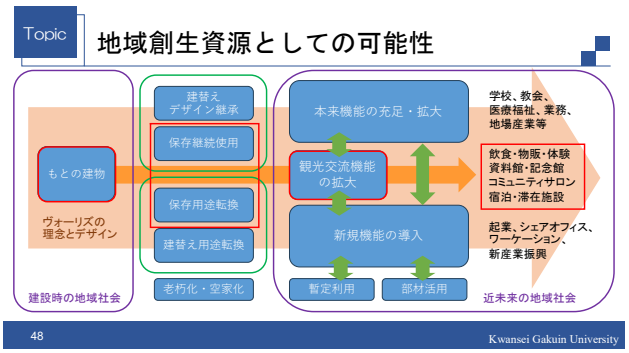
また、登録文化財や重要文化財指定という道はもちろん検討すべきですが、本当に地域にとっての宝物なのか、「地域文化財」として評価されるのかがヴォーリズ建築にも求められると思います。

ヴォーリズという人はいろんなタイプの建物を大量に作った、極めて珍しい建築家です。それからもう一つ、ヴォーリズが活動した 1905 年から 1950 年ぐらいの間、同時代の建築家たちとあまり交流したという記録が見られません。そういった交流が少なかったことが、建築家としての評価が少ないことにつながっているのかもしれません。どうも独自の路線で動いてたように思えてなりません。例えば同時代を生きた西村伊作はキリスト教の伝道ともつながる建築家ですが、あまり接点がみられません。どなたかに教えていただきたいなと思っています。ヴォーリズは軽井沢でいろんなネットワークを作ってるけども建築家間のネットワークはどうなのでしょう。もしそういう興味を持っている研究者がおられれば教えていただきたいなと思います。他の建築家と比較してみたときに、何か発見があるかもしれません。たとえば今日は岡先生もいらっしゃるので、村野藤吾と比べたらおもしろいかなとも思います。

話しを戻します。建築と人物の物語をどのように紡いでいくか、どんな物語が見出せるか、できれば熱狂的ファンやマニアがいてくれると動かしやすいかもしれません。ヴォーリズには全国にマニアがいらっしゃいます。活動団体を組織できるかネットワークが生まれるかといったあたりが、地域創生における建築遺産の活用のための一般的な課題になるのかなと思います。もちろん、やっぱり稼がんとあかんということもあります。継承するために何で稼ぐのかということで、現在いろんな工夫をされている事例はたくさんあります。稼がないという選択肢もあるのかどうかが悩みどころです。

どんな建物も何らかの理由で建てられました。建てられたときの地域社会の状況というのがあります。時間を経て、近未来の地域社会の中でその建物がどういう役割を担うことになるのかを確認する必要があります。そのうえで、建て替えるけれどデザインは継承するという選択、保存してそのまま用途も継続させるという選択、保存するけれど用途は変えるという選択が迫られます。もちろん建て替えて用途も変えてしまう、あるいはとりあえずほったらかしにしておくというようなことも起こります

現在いろんな形で言われている保存活用論は、要するに元の建物を保存継続使用あるいは保存用途転換して、観光交流機能を拡大させて、飲食物販体験施設や資料館・記念館、宿泊滞在施設等にしたらいいんじゃないのという話が中心になっています。その通りかと思いますが、この流れからこぼれ落ちるものもたくさんあります。そうしたときに、ヴォーリズ建築に限りません



が、その特定の建物が持っていた機能を、さらに充足拡大していくということであったり、今までとは違う思いもかけない機能を導入したり、あるいはすぐの投資が難しい場合は暫定利用したり、取り壊しがやむを得なければ部材の再利用や活用を考える等、いろんな選択肢も考えながら全体としてどうするのかという方向性を決める必要があります。

本来機能の充足という視点では、先ほどから申し上げる学校とか教会といったものが中心になるかと思いますが、もっと他にもつまりこの図右側の四角の赤い枠の中以外の機能についても検討すべきです。

例えばここにシェアオフィスとかワーケーションとか書いてますけども、空き家をシェアオフィスにしたいよねと言ったときに、これ実はヴォーリズの建物なんですよ、あるいは実は西村伊作の建物ですと言われたときに、ちょっとだけでも嬉しくなる人がいれば成功かなと思います。ちょっとした付加価値付けと言えばそれまでですが、建物自体の魅力と物語性を示すことが大切です。新たな機能も組み合わせていくことで、もっと幅の広い継承と地域資源化が考えられるのかなと思います。結局先ほどの地域文化財という話につながるのかもしれませんが、個々の建物の話だけじゃなくてそれが地域にとってどんな価値が見いだされるのかを共有することが必要と思います。

ということで私のお話しはおしまいです。どうもありがとうございました。

＜質疑応答＞
篠原（JUDI 会員）：角野先生ありがとうございました。ヴォーリズの研究活動を始めて、どれぐらいですか？

角野：2 年ぐらいですね。

篠原（JUDI 会員）：この 2 年間の研究成果とこれからの方向性について詳しくお話しいただきました。この後 30 分ほどお時間がありますので、意見交換ができればと思います。
最後にお話しされた「地域創生資源としての可能性」というところで、全国に点在しているヴォーリズ建築をその地域の資源としてどう生かすかという視点かな？と思って聞いていました。一つのエリアの魅力づくりにはその中にあるヴォーリズ建築をどう生かすのかということとともに、ヴォーリズ建築以外のいろんな魅力と一緒にその地域をどう盛り上げていくのか？、いわゆるエリアの魅力アップ活動という視点も必要になってくるのではないかと思いますが、そのあたりについての角野先生の考えをお聞かせください。
角野：ええ、ヴォーリズ建築で地域活性化をできるところはそんなに多くないと思うのですよ。そのなかで近江八幡にはたくさんあるし、元々の物語的にも近代の近江八幡にとってヴォーリズは重要な人物ですが、日本全国どこでもできる話ではありません。ヴォーリズ建築は国内にバラバラ、ポツンとあるけどそれを核にして、それだけで地域の活性化になるのかというと、極めて怪しい。だからそれだけじゃなくって、ヴォーリズ建築とそれにまつわる話しをアピールする必要があると思います。そのうえで地元の他の魅力と組み合わせていく。例えば、ありていで言うとヴォーリズ建築に泊まって地元の美味しいもの食べられるとか、あるいはそこから景色がこんなふうに眺められますよという、プラスアルファの魅力を訴えていく。それを考えられるのはやはりそれぞれの所有者であり、それを活用しようとする人たちの知恵比べになるかと思います。だからヴォーリズ建築の全部が全部でできるとは思っていません。

篠原（JUDI 会員）：ありがとうございました。会場のみなさんいかがでしょうか？

岸田（JUDI 会員）：竹中工務店の岸田です。リストで所有者や運営者を調べている中で、施工会社も調べていますか。竹中工務店が結構多い気がします。

角野：多いです、はい。面白いね。何でなんやろ。元々近江八幡でヴォーリズが接したのは日本の大工さんなんですよ、初めの頃はね。おそらく、広岡浅子はじめ財界と繋がっていく中で、竹中さんとの関係が深まったのかもしれません。例えば大同生命と竹中さんとはどういう関係だったのかよく知りませんが、うまくお答えできませんが、調べたらすごく面白いと思います。豊郷小学校はどこでしたっけ？

岸田（JUDI 会員）：竹中だったと思います。例えば、大丸や松坂屋さんと竹中は元々古くから付き合いが深いです。

角野：なるほどなるほど。

岸田（JUDI 会員）：東洋製罐の高崎家と竹中家とは小林一三などを介してトップ同

士の付き合いの中で付き合いが広がっていくとかしたのでしょうね。

角野：もちろんええ。ただ高崎記念館は、あの高崎さんは後で買い取ってますからね。元は諏訪邸ってお宅やったので、竹中さんが建てたかどうかはわからない。ただ、当然の阪神間のいろんなネットワークが影響したのは間違いないと思います。

岸田（JUDI 会員）：竹中工務店が建物の保存をする中で、山崎の聴竹居は所有者から買い取って、地域の方々の NPO に運営していただいているのですが、買い取る時に、設計者が元々竹中工務店の設計部長だったとか、会社として買い取る意義は何なのかっていう価値付けが重要でした。一方で買い取るまではできなくても、東京の九段にある山口萬吉邸では、竹中工務店が東急さんらと一緒になって、所有者から借り上げてサブリースでレストランや展示会場などで活用している。山口萬吉邸はいい立地にある邸宅なので、ルイ・ヴィトンなどが VIP のお客さん向けの商談パーティーに利用するとか、古い建物の価値を活かした特別な使われ方でビジネスになっている。また、新橋にある堀ビルも竹中工務店が所有者から借り上げて、特色あるコワーキング施設としてサブリースしている。これらは古い建物を残すための一つの方策ですが、結局はビジネスとして成立するかの判断になる。これらはどちらも東京の都心部で経済価値があったのでできている。企業の目線でいけば、古い建物を残せる可能性とは、やっぱりそういうビジネス成立性になる。

角野：ありがとうございます。だからそういうビジネスに乗れるものはそうしてくださいという話なんですよ。当たり前だけれど、乗れないものの方が多いですよね。だから放っておくと、当然減ると思います。今から 10 年 20 年経ってそのときに無くなるぐらいだったら今のうちにこうした方が良いのではないかという話しが欲しいですね。それから都心の論理じゃなくて、地方では全く別の論理じゃないとビジネスが成立しづらい。そこをどうするか。やっぱり学校と教会は固定資産税が減免されるから比較的生き残りやすい、それにぶら下がるような形で保存活用できるものはなかろうかとか。

岸田（JUDI 会員）：ありがとうございました。

高原（JUDI 会員）：建築の設計事務所をやっている高原です。当然ヴォーリズのことは知ってはいましたが、先生のお話をお聞きして、よりヴォーリズが好きなったなっていう感じです。
僕らの世代では、建築家っていうのは、アーティストであることが建築家だよ、みたいな考えがありました。
ですが、おそらくヴォーリズは建築の設計を小さな範囲の職種で捉えず、社会貢献するための一つ職種ぐらいに捉えて、多様な建築設計に取り組んでいたのでは。とお話聞いて改めて感じました。私自身もそのスタンスで建築設計に取り組んでいて大いに共感しました。
また、現代の若い世代の建築家には、カフェを自身で経営したり、コミュティーや街と深く関わり合ったりして新たな建築設計のスタイルを築いている人が何人かいます

が、ヴォーリズ 100 年ほど前から、現代においてもとても新しい事にチャレンジしていたと思います。これらの建築への取り組み姿勢は、彼の日本での日常の生活環境が影響していたのではと思います。
例えば、私たちの建築家仲間では、著名な建築家は、奥さんの影響がとても大きいと言われています。黒川紀章や磯崎新さんの奥さんの話は有名ですし、私が在籍していたシーザーペリもディアナバルモリというランドスケープデザイナーのパートナーと常に一緒に仕事をしていました。建築家の一番近くで、一番の理解者でもあり、一番の批評家でもある奥さんの影響って大きいと思うのですが、ヴォーリズの奥さんについてご存知ならば教えてください。

角野：奥様は一柳満喜子さんっていいます。広岡浅子の娘婿の恵三の妹が一柳満喜子です。一柳家は小野藩の大名でした。広岡浅子は朝ドラでもあったように京都の三井から、大阪の加島屋に嫁ぎます。その後大活躍して、大同生命の設立にも関わります。それで満喜子がヴォーリズの建築設計とか行動にどう関わったのかという話しは噂話程度は聞いていますが・・・・
一柳満喜子は神戸女学院出身で、その後アメリカに留学します。英語ができたことから、ヴォーリズと出会い近江八幡で結婚します。大名の家系の娘とアメリカ人との結構にはいろいろ困難があったと推測はできます。満喜子自身は清友園という幼稚園を近江八幡で設立し、それがのちの近江兄弟社学園につながります。本人もキリスト者であり、非常にしっかりした人だったと思います。建築設計そのものにどれぐらい意見を言ったかは、まだ勉強不足でよく知りません。

高原（JUDI 会員）：安藤忠雄さんも、彼の著書に奥さんの助けが大きかった書いてあったりして、やはり一番理解者であり彼の建築設計への取組み姿勢に大きく影響していたののではと思います。なので、ヴォーリズの奥さんのことについてももう少し知りたいなと思います。

角野：幼稚園の設計に意見を出したことは間違いないと思いますが、他の例えば大同生命のオフィスビルに口出ししたかどうかというあたりは調べてみないとわかりません。

篠原（JUDI 会員）：別の質問になりますが、角野先生のお話の中で出てきました「村野藤吾さん」については、関西大学の岡先生いかがですか？

岡（JUDI 会員）：先のページにあった「大学は大丈夫」というところですが、大学は大丈夫ではないですよね。使っている人たちの建物に対しての理解がなければ。関西大学の村野藤吾設計の研究棟は、日当たりが悪くって狭くって、建て替えて欲しい・・・と文句言われています。私達は残してほしいと思っているのですが、やはり機能的には問題が多く、それなりの更新をしないと使い続けられないです。先日、一粒の会一粒社が守っておられる郵便局が、何とかならんかっていうぐらいボロボロでした。誰かが受け取っても、修繕には相当お金がかかるので、やはり稼がなきゃいけないと思うのですが、その稼ぐ方法が知りたいところです。村野藤吾建築でも、商業建築は難しいですが、関西大学の村野藤吾建築も近々いくつもなくなる予定ですが。

角野：大学はさっきも言いましたが、実際にはどんどん建てかえています。そのなかでミッションスクールの場合は、これだけは残そうという考えがありますが、関大などではどうなのでしょうか。

岡（JUDI 会員）：大切な建物として残そうとしているものもあるのですが、普通の校舎や体育館は、機能性追求するので無くなってしまいます。

角野：それはうちも一緒ですよ。ただそのときに、デザインをどう継承するかという、そういう議論が必要かと思います。

岡（JUDI 会員）：紹介いただいた中のデザイン継承は結構よくできていますね。

角野：さっきの例えばプール学院とか？どうですか、施工された竹中工務店さん。もちろん現物はチラリと外から見たことはありますが、たまたま設計意図が書かれた資料を見つけたので紹介しました。そういうことを意識してもらえるのはすごく大事だと思います。当然一粒社ヴォーリズ建築事務所は、そこはものすごく意識しています。

岸田（JUDI 会員）：プール学院の設計者を知っているのでコメントしづらいですが、一粒社ヴォーリズさんと調整しながら設計を進めています。それは大丸心斎橋店でも同じです。

角野：なるほどなるほど

岸田（JUDI 会員）：残すべき要素と変えてもいい部分を整理する作業をしますから、重要なテイストは残されているのかなと。

岡（JUDI 会員）：デザイン継承という方法が一番ありうるかなと思います。そのまま残すのも難しから、何か歴史を少しずつでも引き継ぎながらやるという方法なのかなと思います。

角野：だから関学で言うと、神戸三田キャンパスはまるっきり何もなかった所に、もしヴォーリズだったらこんなふうにしたのではないかというふうに設計されてますね。

加藤（JUDI 会員）：なかなか大変な整理をされて、非常に参考になりました。お伺いしたいのですけれど、そもそもヴォーリズ建築には一定の様式があるのかという点です。関学はコロニアル・ミッションと言われますけど、あれは日本設計の内藤さんが作った名前ですよ。山形さんにも何度も聞いたんだけど、ヴォーリズの 1700 ぐらいある作品の中に一貫した様式が伺いしれるのか、あるいは、コロニアル・ミッションに彼の建築を代表させて良いのかとね。答えは否定的だったようです。そこでユネスコの世界遺産となっているガウディ・スタイルの価値と比較してみるとき、ヴォーリス建築の人類史的価値（OUV）をどこに見いだせる（可能性がある）のか。いろんな将来を考えてみたくなります。世界文化遺産は八項目の価値基準に整理をされていますのでそのうちのどれに当てはまるかと考えたときに、どうも一番目の建築様式ではない。実は 2 番目に時空間を超えての交

流価値があり、これではないか。ヴォーリスという人の一貫性や、その地域的な交流のひろがり、そういう価値があるのでは、という感じがします。地域からみればこれを交流価値のある文化財として位置付けてもらわねばならない。要するに彼のメモリアル価値ですね。その具体的方策はヴォーリズさんの墓場群（or 史跡）に位置付けるのはどうか。建築は用強美のバランスが価値をつくると言いますが、彼の作品全体がバランスのとれた建築価値のチェイン・リストで、これが将来に受け継ぐべき価値です。
ヴォーリズさんって宣教師じゃなかった。なれなかったんですよ。これはすごくコンプレックスがあったのではないか。日本に来て 1700 も設計したけど建築家でもないわけ。商売には成功したと言われるがそれもコンプレックスになったかもしれない。だから同時代の人とあまり付き合いもなかった。アントニー・レーモンドのエリート性に比べると、ヴォーリズ建築には「押し＝一貫性」が感じられない。彼の人となりが地域環境に従う姿勢や柔軟な様式採用、、言い換えれば常にパッシブな設計態度をもたらしたように思える。そうした彼のメモリアルとして残せるんじゃないか、うまく伝えていくと良いと思います。その辺のご意見を伺いたい。

角野：いやいや、後半は加藤先生のご意見をなるほどと思って聞きました。ヴォーリズ固有のスタイルは私も無いと思います。ヴォーリズは明治 38 年に来日し、当時は全くの素人です。彼はコロラドスプリングスのコロラドカレッジを卒業し、ほどなく日本に来ます。実はこの夏コロラドカレッジに行ってきたのですが、様々な様式の建物が混在しています。学生寮もいろいろありますが、学生寮になると本当にもうバラバラの様式デザインなんですね。だから、彼はきっとここで、建築様式というのは取捨選択できるもので、クライアントに合わせて今回はスパニッシュ・ミッションで行こうかとか、今回はネオクラシックで行こうかとか、そういう気持ちだったんじゃないかなと思いました。彼自身はコロラドカレッジに入学する前に MIT で建築を学ぶ予定だったそうですが、コロラドカレッジに進みます。建築への関心があるまま伝道の道に入ります。建築というのは確かに素晴らしいが、それはユーザーのニーズに合わせてデザインすべきと思ってたのかもしれません。それから彼の建築は室内が快適だとか自然採光が上手という評価は、ひょっとしたら日本の大工さんに教えてもらったからではないかとも思います。その後、アメリカから本物の建築家を招聘し、彼もアメリカに行ったり来たりしながら建築を学んでいきますが、そのときに彼は、アメリカの建築雑誌をいっぱい見ています。それをスクラップブック化して、事務所で活用しました。例えば、いわゆるスパニッシュ・ミッション（アメリカ西海岸ではカリフォルニア・ミッションと呼んでいますが）のスクラップブックも残されています。だから、雑誌からデザインを学んでいたのかもしれません。
特に関学等のスパニッシュ・ミッション・スタイルは間違いなく西海岸の影響かと思います。余談ですが、サンタバーバラでは、町全体でカリフォルニア・ミッションのデザインガイドラインを作っていて、商業施設や一般住宅もこれに従っています。だから加藤先生のおっしゃることをなるほどと思って伺いました。

おそらく多くの方はヴォーリズといえば、スパニッシュ・ミッション様式というふうに思っていますが、実際には本当に多様だということをご理解いただけると思います。確かに大丸を見ても、東華菜館を見ても、豊郷小学校をみても全部違います。それを自由に使いこなした器用なビジネスマンだったのかなと思います。また宣教者になれなかったというコンプレックスや、本格的な建築教育を受けなかったという負い目が独自の生き様につながったのかもしれません。そのような人物の物語を知ると建物も違うふうに見えてくるのかもしれません。全国のヴォーリズファンは、彼の生き様に強く惹かれているようです。

篠原（JUDI 会員）：ありがとうございました。そろそろお時間なんですけれど、他に質問よろしいでしょうか？

三宅（武庫川女子大教授）：阪神間の話が出てくるかなと思っていました。岸田さんの質問のときに初めて阪神間で出てきました。今日改めてあのヴォーリズっていうのは全国区の方なんだなっていうことを勉強させていただきました。この寸前の議論のなかで、スパニッシュコロニアルばっかりでないということでした。角野先生と一緒に共著で『阪神間モダニズム』を書いたときには、著者の一人が、スパニッシュミッションスタイルが日本のなかで残ってるのが阪神間だということを思い出しました。今日は地域での取り組みのお話しとなると軽井沢が多かったと思います。（ヴォーリズは多彩で、スパニッシュはその一つであって、私は阪神間イコール、ヴォーリズという思いが強すぎていたことに気づきました）。角野先生の研究の方向性がローカルに行ったらいけないということがあったのかと、思ってしまっていました。

角野：阪神間のヴォーリズ建築については皆さんよくご存じなので、今日は違う切り口でやってみようと思っただけです。

三宅（武庫川女子大教授）：すいません、軽井沢、近江の次に個人的に阪神間がでるものと勝手に想像していました。

角野：いやもちろん関西に多いんですよ。阪神間だけでなく、大阪だって京都だって多い。その中で阪神間は大学と邸宅がよく取り上げられますが、今日はちょっと違う切り口を探しました。

三宅（武庫川女子大教授）：ありがとうございました。

篠原（JUDI 会員）：ありがとうございました。ちょっと時間過ぎてるんですけどもZoom 参加の方で質問とかご意見とかある方がもしいらっしゃいましたら、手を挙げていただけますか？
特になさそうですが、事前に Zoom 参加の方からチャットで提案をいただいていましたので紹介します。「ヴォーリズ建築特にアクセスしにくい滋賀県内の建物を見学するようなバスツアーを企画していただけたらとても嬉しいです」というご意見です。全国に点在してるということであればそれを巡るツアーとかを企画すれば、ヴォーリズ建築をより広めることができるのかなと思ったんですけど、そのあたりについてはいかがでしょうか？

角野：旅行代理店をする気はあまりないのですが、そういったところに声をかけることはあるかもしれませんね。ヴォーリズには非常に熱烈なファンが結構いらっしゃるんですよね。自分で調べてホームページにあげたりされる方がいっぱいいらっしゃいます。堂々と聳え立つ建物ではなくて、町なかに何げなく佇むヴォーリズ建築を発見するのを楽しんでる人が結構おられます。いわゆる一般の観光客じゃなくてマニアが今は支えてると思います。それをどのように広げるかはむしろ地域の側で考えてほしいなと思います。

篠原（JUDI 会員）：ありがとうございました。まだまだご質問があるのかもしれませんが時間来てしまいましたので、これで本日のセミナーを終了とさせていただきます。最後に講師の角野先生にもう一度拍手で終わりたいと思います。

角野：どうもありがとうございました。

（了）